

## 葬列

自動ドアを蹴る

あたふたと戸惑うように  
開閉を繰り返すドア  
——まったくの二等動物

ぞろぞろと事も無げに  
黒服の者たちが通過してゆく

「あなた」  
ふと、そのような声

私は握り締めている  
再び動き出した腕時計を

夢見るように、ゆっくりと  
空を滑る雲

朽ちることを願う——  
そういうことを初めて知った

青ざめた唇に塗られた紅のように  
グレーに塗られた建物の壁に触れる

自動ドアを蹴る

かつて  
嬉々として姉と一緒にやったように

(2011.11.22)